

# 日本語教育研修会（2011.1～2011.12）講演要旨

## 基本語学習サイト「経済のほんご」の開発

< keizai-nihongo@com >

小宮千鶴子（早稲田大学日本語教育研究科教授）

「国債」「公定歩合」などの経済の基本語は、一般日本語教育では学習の機会が少ないが、大学学部などで経済関係の専門教育を受ける日本語学習者や日本企業への就職を希望する日本語学習者などには、習得の必要な語である。

経済の基本語学習のために開発した学習サイト「経済のほんご」では、学習者が学習目的とテーマから基本語を選んで意味と使い方を学ぶことができる。学習できる基本語は、専門教育のための学術用語612語と就職活動などのためのニュース用語140語で、両者には重複もあるが、いずれも中学と高校の公民科3科目（公民、現代社会、政治経済）40種の教科書索引の25%以上に掲載された語である。

主な基本語92語には、「物価が上がる」のような使い方を示す専門連語とその例文とが付いている。専門連語とは専門的な概念を表す連語で、本サイトでは基本語の選定資料と同じ公民と現代社会の教科書24種の本文から選定した630種の専門連語が学べる。専門連語の例文は、35字以内の短文で、専門連語の用例などを参考に日本語教師と経済の専門家が協力して作成した。基本語と専門連語には、英訳・中国語訳・韓国語訳があり、基本語・連語・例文には音声が付いて、例文はディクテーションやシャドーイングの練習もできる。

本講演では、本サイトのデータの詳細と開発の困難点などについて述べた。

## タスクシラバスに基づく口頭表現指導

—中級レベルを中心に—

工藤嘉名子（東京外国語大学留学生日本語教育センター准教授）

東京外国語大学留学生日本語教育センターの国費学部進学留学生予備教育プログラム（以下「1年コース」）では、アカデミックな日本語力の養成を目的とし、タスクシラバスに基づく口頭表現指導を実践している。本講演では、「タスクの文脈化」という概念に焦点を当てながら、中級レベルの口頭表現指導における授業設計と教材開発の取り組みについて概説した。

「タスクの文脈化」とは、カリキュラムなどの教育的文脈や、学習者を取り巻く社会・文化的文脈の中に位置づけてタスクを設計することである。「文脈化されたタスク」は、タスクの目的や意義、個々の学習項目・活動とタスクとの関係性などが「学び」の文脈の中で認識・共有できるため、学習者は能動的・自律的にタスクに取り組むことができる。こうした考え方にに基づき、1年コースの「中級口頭表現」クラスでは、「自国の学校制度」「自国の文化紹介」「自国の環境問題・人口問題」という3つの口頭発表タスクから成る技能別指導を行っている。これら3タスクは、通常の中級日本語クラスで扱うテーマや文型・語彙と緩やかに関連し合いながら、各タスクのテーマや学習項目が有機的に結びついて展開し、上級レベルのタスクである研究発表へと発展するよう設計、教材化されており、学習者の口頭表現能力の向上、満足度などの面において一定の教育効果を上げている。

## 中国・海南大学における日本語教育

朱峰（海南大学日本語科）

本講演では、中国海南大学における日本語教育の現状と問題点、および今後の課題を中心に考察した。まず、中国における日本語教育の概要を紹介し、日本語人材養成に見られる新しい動きを分析した。次に、海南大学日本語専攻課程の沿革と組織構成、学生の学習動機、日本語専攻のカリキュラム、国際交流プログラムなどの面から海南大学における日本語教育の現状を紹介した。問題点としては、教材が古いこと、各授業の相互支援体制が確立されていないこと、図書資料および学術情報ネットワークが不足していること、また日本語学・教授法の研究が遅れていることなどを取り上げた。以上のような点を踏まえ、今後の課題として、体系化したカリキュラムの作成、教授法改革への要望、および日本語専攻出身の研究者と専門分野の研究者との連携などが求められると考えられる。

質疑応答では、中国日本語教育における地域差や、就職率の統計方法、外国語学校との連携である「3+1プログラム」の実施などについて、様々な意見や質問が出された。

## 日本語・日本事情遠隔教育拠点で開発中のeラーニング教材について

市原明日香 古川雅子 飯田将茂（筑波大学留学生センター研究員）

平成22年度に文部科学省により認定され、留学生センターに設置された「日本語・日本事情遠隔教育拠点」は、本年度春に研究員が4名加わり、本格的に始動した。今回、今井新悟教授と研究員が検討した教材コンセプトと構成について初の報告会を行った。教

材の構成（市原）、システムの構想とWEBサンプル画面（古川）及び、ドリルや日本事情の収録映像（飯田）を紹介し、フロアから質疑や意見をいただいた。

本教材が想定する学習者は、SFJと同様、ゼロ初級から日本語を学ぶ日本留学中の者である。本教材は、独習型であり、文型、意味、機能に焦点を当て、各課の学習時間は15分程度とする。学習の流れは、学習項目を示すビデオ、文法説明（学習者向けと詳細解説版）、練習（ドリル、会話練習、タスクやシュミレーションゲーム）、確認テスト、日本事情映像となる。

eラーニングシステムでは、学習者の学習履歴管理の他、教師エージェント等によって学習のナビゲーションを行う点、音声認識システムによって学習者に発話機会を積極的に与える点、日本語教材部分を学校とみなし学習後に学習内容に沿ったタスクイベントが学校外のシーンで発生し、RPGのように学習者の分身や周りの登場人物が成長していく点などが特徴であり、学習者同士の交流等が可能なSNSの設置等に取り組む予定である。

フロアからは、映像について季節の行事や人物による表現の違いを映像で見せることは教育効果が高いという意見があった。

## コーパスに基づく文法研究

李在鎬（りじえほ）（筑波大学留学生センター准教授）

本講演では、コーパスに基づく文法研究の背景と具体的な分析方法について説明した。研究背景の部分として、コーパスにもとづく文法研究は、1) 個別言語の言語運用に対する記述であること、2) 大規模な用例の観察に基づいて行われていることを説明した。具体的な分析の方法論については、多変量解析に基づく個別研究を紹介した。具体的には、1) クラスタ分析を用いて語義と語形の関係性を明らかにする手法、2) 共起ネットワークを用いて助数詞と動詞の共起の統計的有意性を明らかにする手法、3) 判別分析を用いてコーパスデータと日本語能力試験の読解テキストを対応づける手法を紹介した。最後にコーパスに基づく言語研究は、単なる用例の収集方法だけに限定されず、言語事実を発見する新たな方法論になり得ることを指摘した。